復習予習そして反省の日々で15年

学生アルバイトから始まり、ミスの臭い(カン)が何となくわかるようになった15年。大阪神戸で得た事務員経験がちょっぴり偏って身についた育休明けのコテコテの関西人の私に原稿依頼。「(どんな原稿になっても) いいんですね!」と確認したものの、守秘義務を考えるとかなり難しい。

法律事務所職員

柴田佳世

胎教の効果?!

「胎教は大切!」と、とある妊婦雑誌に書いてあった。話しかけるほど脳みその皺が増え賢い子供が生まれると。私の場合は…第1子妊娠中、主に破産・倒産業務を担当していた。債権者との電話や取引履歴、依頼者の家計簿とにらめっこで、電卓やエクセルと格闘し、利息制限法「18%!」「〇〇〇〇はひどい!」等という言葉に囲まれる毎日。同僚(しかも男性)そっくりの顔で「18%!」という赤ちゃん(なぜか女の子)の夢まで見るというまさに、債務整理どっぷりの日々。

脳みその皺が、偏ってないかと心配の中誕生した娘は、数字をこよなく愛し、宝物は「ブルーの電卓!」という、3歳半の乙女である。ちなみに、難民事件や少年事件が多かった第2子妊娠中、どの国や環境でも生きて行けそうな程たくましい娘が誕生した。

我日々修行!!

結婚後に過労から退職し、管財人業務で必要性を痛感した簿記の勉強中だった私を拾い上げてくれた今の事務所は、弁護士11名、事務員26名の大所帯。「内線? なにそれ。どのボタン?」切ってしまいそう。と電話1つにビクビクしていた当初。それでも態度はでかい(古)新人であった。

全てにおいて規模が違う。今までは、弁護士の予定も依頼者との打合せや電話内容も漏れ聞こえるため、先を読んで準備ができた。しかし、今何が進行し、何を望まれているのかがリアルタイムでわからないという不安。それでも、1日誰とも話せず、サラ金業者からの電話で

すらありがたいと思うことがあった昔を思えば、弁護士や仲間のありがたさが身にしみる。後輩(前事務所の)からの、「お茶を出すことが大切な仕事やったら先輩がすればいい!」との素朴な疑問や「若しくは」「又は」の違いから訴訟手続についての質問まで、即座に答えられるように日々修行である。慣れこそが一番の大敵!!を肝に銘じ、依頼者と裁判所と弁護士を(たまに相手方も)繋ぐ細いが切れない強い糸を目指す日々である。

破産手続って…

貸す人がいるから借りる人がいるのか、その逆か。鶏が先か卵が先か…。そんなことを考えたりして現実逃避。債務整理をしているとそんな気分になってくると、裁判所からの電話を受けると頭が「???」となる時もある。

原因が浪費やギャンブルの場合は、もっと「懲らしめてやりなさい」と水戸黄門の台詞のように事務所では話すがたまにある。しかし、貧困が原因の場合にはやるせなくなる。社会で揉まれたことがなさそうな(高額所得者の)裁判官から「何で借金したの、普通に生活していたらこんなことにならないはず!」と指摘があると書記官から聞くと、内心「世帯の手取が18万円あるなしで、8万の家賃を払って家族4人生活してみ?」とつっこみたくなる。生活保護受給者より厳しい生活である。だからといって借金の言い訳にはならないが、貧困が原因の破産者には、もっと寄り添って親身に説諭してくれてもいいのにな…。長年債務整理に携わった私の感想である。